

<論文> 島尾敏雄における敗戦と復員

著者	山中 秀樹
雑誌名	日本文学誌要
巻	52
ページ	54-62
発行年	1995-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019844

島尾敏雄における敗戦と復員

山中 秀樹

序

昭和二〇年九月、第一八震洋特攻隊隊長島尾敏雄が神戸に復員した。それからおよそ四十年後の昭和六一年、作家島尾敏雄の遺稿「(復員)国破れて」(「群像」昭和六二年一月号)が発表された。

周知の如く、氏は戦後、作家としてスタートを切って以来、終生自身の特攻隊体験を書き続けた。童話風な手法によったり、夢の世界に偏った初期作品は、その体験がそのようにしか捉えられぬほど異様であったことを物語っていたが、昭和二十四年から始まる「出孤島記」連作(「出孤島記」・「出発は遂に訪れず」昭三七・「その夏の今は」昭四二)に至って、その体験が真正面から見据えられ、リアルに描き出された。しかし、それも氏の体験に即して言えば、昭和二〇年八月一三日から一九日までのことであって、それに続く復員前後のことはこの「(復員)国破れて」まで書かれることはなかった。作家の死により未完となったとは言え、震洋特攻隊の隊長として奄美加計呂麻島に駐留

した主人公が敗戦を迎え、その島を出るところまで書かれたこの作品は、まさに「出孤島記」の大団円をなすものであった。

時間間隔をあげながら一つの体験を作品化するのとは氏の文学の特徴であるが、実際の復員から四十年余、「その夏の今は」から数えても二十年という歳月はやはり長すぎると言えよう。本稿では、主にこの二十年に焦点を当て、この間の経緯を「うしろ向きの戦後」(昭四九)、『魚雷艇学生』(昭五四〜六〇)、『震洋発進』(昭五七〜六〇)などによって跡付けながら、「(復員)国破れて」を読み解くことで、島尾敏雄にとつての敗戦と復員とは如何なる意味をもつものなのか、考察を試みるつもりである。

一、昭和四九年の島尾敏雄——「うしろ向きの戦後」について

「その夏の今は」以後の数年間、島尾敏雄が書いた小説はわずかなものであった。それは、この間の自転車事故とその後遺症、鬱状態の悪化、更に図書館長としての責務の圧迫感などの外的要因にもよるが、

わずかな作品中戦争体験を題材としたものが一篇もないという事情を考えると、何よりも、一気に書こうと思っていた特攻隊体験の「後先」がなかなか書けないという内的要因によるのだろう。順番から言っても、作家が次に書こうと思っていたのは、「後先」の「後」すなわち復員前後のことであつたと思われるが、それが書けなかったのは、作家にとって、復員をもたらした敗戦が容易に形象化しえぬものだったからである。敗戦の意味が明確に把握されねば、復員は果たせない。

「うしろ向きの戦後」(昭四九)というエッセイがある。戦後三十余年、「その夏の今は」から七年を経たこの時期、作家が敗戦と復員の問題に向き合い、まず何よりもその形象化を、と考えていたことを物語る重要なエッセイである。そこでは敗戦は次のように捉えられている。

「私にとって敗戦は圧倒的に特攻身分の約束の解除としてうつったのだった。(中略)それまで死のわくの中でだけ残余の生を如何に処理するかにつとめてきた私のまえに、無期延期となつた死が色あせ、かかえきれぬほどの生が投げ出されたわけだ。何かに強いられるのではなく、自分のやり方でやって行けそうだという感受の中で、不自然なほどの希望が湧いていた。世間の習慣に合わせる事が摩擦を少なくする方法だと思ひこむあきらめに似た考え方はむしろ世間への不適合の恐れにさえなっていたが、国の破れという現実がその習慣をも破壊したかもしれぬと考えることで、むしろ希望が見えてきたのだった。破壊の対象となるものの中には、私の期待では世間一般の発想や挙措まで含まれていたが、ごく具体的な例をひとつ挙げるなら、徴兵制が空中分解したこと、安堵と言えらるだろう。しかし根底のことは習慣的な発想に対する恐れがなくなつたと錯覚したこと、徴兵制のことをまず思い浮かべたのは、その制度が

物心ついて以来私の気持ちにわだかまっていたからで、それをどう通り過ぎて行くかということが私の課題であつた。小学生の年配の頃の私にとって、兵隊検査の結果の軍隊生活の中で、自分の正体が暴露されるという恐怖を除くことは容易ではなかった」

作家にとって、敗戦は二つの意味を持つものであつた。一つは特攻死という約束の解除であり、もう一つは徴兵制という兵役の束縛からの解放である。後者が前者とどう違うのかと言えば、それは、特攻隊体験よりはるか以前、「小学生の年配の頃」から、それをどう通り過ぎて行くか心にわだかまっていた束縛だったということである。徴兵年齢間近の青年であるならば、それも納得のいくことであるが、小学生の頃から徴兵制を束縛と感じているとは、特異というほかはない。しかし、その根底には「暴力に対処する姿勢」というなやましい問題があつたのであり、作家にとって徴兵制とは、「世間の習慣」「世間一般の発想や挙措」の象徴であつて、「自分の正体が暴露されるという恐怖」を抱かせるものだったのである。

例えば、特攻即時待機の状態からの奇跡の生還を描いた「出発は遂に訪れず」においては、当然のことながら、圧倒的に特攻死からの解放による安堵感が書かれていた。しかし、わずかではあるが、その陰に隠れるかのように、徴兵制の束縛からの解放についても書かれている。特攻隊長の「私」は、防備隊に向かう時にはいつも、「身軽な一羽の小鳥の気分」になることができる。自分の部隊すなわちその束縛から離れることが全くの解放感を抱かせるからである。それは、トエの下に向かう時とも異なる。八月一五日昼頃、防備隊に呼び出された「私」は、同じようにその途上で一人山を行く自由を享受しながら、しかし突然「うしろ襟首をつかまれ」て小学生の頃の「古い日本」に引き戻

されるような感覚に陥る。その「古い日本」とは、「自然は充実し、がつしり統一されて見えた世界」であって、常に自分を脅かし、束縛し続けてきた徴兵制のある世界であった。その頃の自分の感覚を「私」が「悔い」のように感じたり、その頃の自分の姿に脅かされたりするのは、わずかな間にせよ今せっかく解放感に浸ることができたのに、再びその束縛に捕えられるからである。「うしろ向きの戦後」において作家が、終戦時に原爆による自然の消滅をも願っていたことを語っているが、そこから考えても、「自然は充実し、がつしり統一された世界」は「私」にとつては束縛の象徴だったのである。ただし、この場面での「私」はまだ終戦の事実を知らないから、この作品世界の時点或いは執筆の時点では、それを主人公乃至は作家がはつきりと自覚するまでには至っていないと言えよう。

「出発は遂に訪れず」から五年後に書かれた「その夏の今は」では、特攻死という危機は去り、そこから免れた安堵感も既になくなっていく。なぜなら、「私」は軍隊に関わる新たな死に取り巻かれていくからである。その死とは、終戦により組織の秩序が崩壊し始めたとは言え、徴兵制というその組織の下に集った人々の関係によってもたらされる死なのである。トエのいるOの部隊へ行くという行為一つをとっても、それまでは死の地点から生の方へ近接することを意味していたのが、必ずやってくる出撃がすべてを帳消しにしてくれるという保障を失って、生の地点から死の方へ逆戻りすることを意味している。トエの下へ今行くことは部下たちの叛逆の火種になりかねない（現に「私」は、トエをめぐる部下たちのいざこざ、暴力沙汰に巻き込まれることになる）し、叛逆は自分に死を強いるかもしれない。それ故、「私」は士官室にとどまり、ただ軍隊機構からの解放すなわち復員を待つので

ある。つまり「私」に残されたのは徴兵制の束縛だけということになる。

作品世界の時間が推移していく中で、徴兵制の束縛が主人公の中で意識されつつあることがわかるが、作家の中では明確になっているとまでは言いえない。しかし、エッセイ「うしろ向きの戦後」に至って、明らかに徴兵制の束縛からの解放に作家の意識が向かっている。とは言え、作家にとつて、特攻死からの解放がそれほど重要ではなかったということでは決してない。作品世界の時間の推移はもろろんのこと、作家が時間をかけて体験を反芻し書くことによって、より根本的なものが浮かび上がってきたのである。

終戦当時の作家にとつてまず「圧倒的」だったのは、特攻死の束縛から解放されたという安堵感であったが、長い時間を経て過去を振り返った時に確かなものとなってきたのは、自分が徴兵制の束縛からの解放を強く感じていたということであった。それだけ、作家にとつて徴兵制の束縛は根の深いものだったのである。なぜなら作家は、「世間の習慣」「世間一般の発想や挙措」の象徴である徴兵制によって「自分の正体が暴露される」と感じていたからである。つまり、そう感じてしまう自身の資質に関することだからである。しかし、作家は自身のその資質の問題にまだ深く踏み込んではいないし、敗戦の意味付けとしてもあくまで束縛からの解放を意味する（終戦）の域を出ておらず、不十分である。昭和四九年の作家が悟っていたのは、終戦がその束縛からの解放を自分にもたらしたかに見えたが、実際はそうではなかったということである。

「いずれにしろあの敗戦のあとで私が実感したことは、国は破れてもなお山河は残っているという当然なことへの鮮やかなおどろきで

あった。だから敗戦直後の国の中で私が目にしたことはむしろ期待はずれでさえあった。原子爆弾の効果はもつと徹底したもの、原子の破壊による物質の完全な解体、つまり山のかたちも灰のようにならずれて無くなってしまうものと考えていた。しかし復員のために逆上陸してきた日本本土の土地のどの部分もそのような状態を示してはいなかったし、原子爆弾で破壊され尽くした都市でさえも、自然が溶けて消失してしまったのではなく、むしろ本来の姿を回復したかの如く見えた。(中略)兵役の義務は微塵にだけは、私を束縛するものは何もなく、いわば私は自然の中にほうり出され、すべての約束ごとから自由になれたと思った。なぜか私はそのことばかりが強く受けとられたが、そのことに反比例して破壊の度合いが不徹底だと感じたのだった。どこに戦争の痕跡が残ったと言えたらう。みんなもとの通り、ほんの表面のかすり傷だけではないか。おそらく自分ひとりが生き残ったと考えたがったこともひどい見当はずれであった」

原子爆弾や国の破れが徴兵制に象徴される「世間の習慣」をも破壊したと思ひ込んだが、その破壊の度合いは不徹底であり、それによって抱いた希望が「錯覚」に過ぎなかったことを自覚しているのである。国が破れても山河が残っているように、「世間の習慣」すなわち束縛もまた残っていたのである。

更に言えば、このエッセイは、「(復員) 国破れて」とかなり重複する記述を持っているのである。後述するが、終戦後に感受した自由の解放、希望が実は錯覚だったこと、原子爆弾がすべての約束ごとをも破壊して、その解放、希望をもたらしてくれると思っていたことが、ほぼそのままの形で「(復員) 国破れて」にも書かれている。というこ

とは、昭和四九年の時点で「(復員) 国破れて」が書かれてもよかったはずである。では、何故この時点で小説として形象化されることがなかったのか。それは、この時点でもまだ、〈敗戦〉の真の意味が欠けていたからである。〈敗戦〉とは、特攻死や徴兵制の束縛からの解放をもたらした終戦の意味だけではなく、国が破れても束縛があったというような、束縛を強調するためのレトリック上のものだけでもなかったはずである。やはりそれは自分の資質に関わるものだったはずである。前述したように、ここではその問題に深く踏み込んではいないが、わずかにその意識が作家に兆し始めてはいる。

「たとえ敗戦という秩序の崩壊に襲われても、流されずに残るものは、暴力に対処する姿勢というなやましい問題、臆病な何かにかわる各自の性格の問題なのかもしれない、なお分解すれば、感受性の多寡のそれに帰着しそうなことであった」

「感受性の多寡」。ここには、束縛を束縛と感じすぎる自分自身の資質に対する疑いもあらわれているのである。だが、まだ自分がそこで足踏みしていることを作家は自覚している。

「現在の私のおどろきは、戦後三十年近くも生きてきたということだ。その三分の二近い期間をしかも戦争中に戦闘姿勢で待機した島嶼の周辺で生活してきた。そのことはほかのどこで生活したにしたところで変わったことではないのだけれど、一度復員して神戸と東京での生活に失敗した私は、ふたたび未復員の場所にもどってそこを脱け出さない状況をこしらえてきた側面のあることにも気づかないわけにはいかない。私はまだ復員していいないと、ふとそんなふうと思うこともある」

たとえば妻の発病後に奄美に戻って暮さなかったとしても、「まだ復員

していない」と作家が語る時、そこにはまだ意味の解き明かせぬ〈敗戦〉すなわち自身の資質の問題があつたのである。作家は、その意味を解き明かさねば、復員できぬと考えていたのである。このエッセイの終わりが幾つかの反語的な疑問で占められているのも、その難問に対する作家の苦闘のあらわれであるように思う。そして、その答えが十二年後の「復員」国破れて」にあるのである。

二、復員への準備―『魚雷艇学生』『震洋発進』について

「(復員)国破れて」は、作家の死後発表されたが、その正確な執筆時期は明らかではない。作中、主人公の「私」が戦後三十数年経って初めて知った事実が書かれているから、おそらく昭和五年前後から執筆が始まったと思われるが、それが未完のまま遺されていたことを考えると、死の間際まで書かれ続けていたにちがいない。

この間、先にまとめ上げられたのは、特攻隊体験の「後先」の「先」、海軍予備学生時代を題材とした『魚雷艇学生』(昭六〇)であつた。その第一章にあたる「誘導振」が発表されたのは昭和五四年。「(復員)国破れて」執筆開始よりもわずかに早く、作家は海軍予備学生時代の作品化に着手したと思われる。それが何故かと問えば、作家は「うしろ向きの戦後」において徴兵制という束縛の根深さを明確に意識し、己れの資質の問題に目を向け始めたが故に、特攻死を約束する前後の軍隊体験とその中で自分のありようを振り返ろうとしたからにほかならないからである。実際そこで書かれたのは、例えば、特攻隊への志願の場面であつたり、温習時間中キャラメルを頬張っていたことを自分だけ当直将校に申し出て、戦友たちとの間に違和が生じるといっ

た所謂キャラメル事件であつたり、「修正」という暴力に対する己れの姿勢であつた。また、この時期作家は、自身の戦争小説を戦争悪や軍隊悪の暴露のためのものでなく、「自分にとつての軍隊体験が何であつたかの根のところ」「自分の痼疾」(『出版は遂に訪れず』ほか―戦争と私・作品の背景「昭五六」)をさぐるためのものであると規定しているのである。言わば『魚雷艇学生』は、復員に向けて〈敗戦〉の真の意味、己れの資質の問題をはつきりさせるための下準備の作品なのである。

ところで、同じ時期に作家はもう一つ復員に向けての準備をしている。戦時中震洋艇を日常隠しておくために掘られた「横穴」への旅がそうである。作家の「横穴」巡りは、昭和三十一年、まづかつて自分が駐屯した加計呂麻島基地跡を訪ねることから始まったが、戦後三十数年経って、その地のほかに全国各地の「横穴」を訪ねるようになっていた。後年のこの「横穴」巡りも作品化され、やはり作家の死後連作集『震洋発進』(昭六二)としてまとめられている。作家がこの時期「横穴」巡りを自分に課したのは、その旅の途上、当時各特攻部隊で起こった特攻艇暴発事故や終戦後の突撃行為、捕虜殺害事件など、震洋特攻部隊が共通に抱えもっていた可能性の一側面を垣間見たからである。それらはいずれも、もしかしたら自分の部隊でも起こり得たことかもしれないのである。その意味で、「横穴」を巡り、それらの経緯を跡付けることは、当時は見通せなかつた自身の体験の意味を明らかにすることだったのであり、その作業もまた、復員するための大事な手続きの一つだったわけである。しかし、これ以上に作家を「横穴」巡りに駆り立てたものは、今は崩れかけた「横穴」に向かい合った時に感じる「へんな快さ」、もう少し具体的に言えば、「忘我の気分」「時の

停止に似た感覚」「気だるいやすらぎと充実」の感覚であった。つまり、作家にとって「横穴」は、自分の魂を鎮めてくれるもの、内面すなわち資質と抜き差しならぬ関わりをもったものだったのである。「世間が物凄い速度で変化し」つつある中、自分が「化石に似た存在」と化してしまったのではないかと思っている作家は、次のように「横穴」を見ている。

「日に日に自然に戻りつつある忘れられた横穴を探し見た時に、自分の戻り行く黄泉のくにへの通り路を見つけた思いにさせられたのでもあろうか。それはこれから先のことに属するのに、昔に戻り行く思いが強く、未来は過去への溯行か廻りでもあるかのように見えてくる」(『震洋の横穴』昭五七)

この「横穴」は、現実のそれを越えたある象徴的な存在であった。「横穴」が「自分の戻り行く黄泉のくにへの通り路」に見え、それすなわち「未来」が「過去への溯行か廻り」に思えてくるような質のものだったのである。これはどういうことを意味するか。私たちも含め、誰もが死ぬ存在である限り、生きていくということにおいて、「黄泉のくにへの通り路」を歩いていることになり、「未来」とはその歩いて行く先のことになる。しかし、作家にとっての死とは、これから歩いて行く先のことである一方で、どうしても三十数年前の特攻隊体験で隣接していたものを意味していたのである。これは、この時点での作家がそのかつての体験からずっと逃れられなかったことのあらわれである。いや逃れられなかったのではなく、「未復員の場所にもどってそこを脱け出さない状況をこしらえ」(「うしろ向きの戦後」)、自ら「化石」と化して、逃れようとしなかったように思える。なぜなら作家は、その体験と原風景「横穴」にこそ自身の魂の平安を見出し出していたのだ

から。まさに作家の資質にほかならない。しかし、この自分の姿勢を問い直す機会を与えてくれたのも、この「横穴」への旅であった。

「たとえば基地跡の浜辺の砂の上に寝転がり、両岸の峰々の木立や、その上に果てしなく広がる青空や流れ行く浮き雲などを見るとまなく目の中に写し取っていると、人間の思慮の中の高々の時の移ろいなど、どれほどの意味を支えているのかわからなくなってしまうのであった。ただそのちっぽけな時の流れの中で、私は一つの戦争の仕組みにがんじがらめにされ、しかも人為の命令によって必ず死ななければならぬ特攻要員という状態に置かれていたのだった」(『震洋幻想』昭五九)

「人間の思慮」を越えた時の移ろい。その中では、その後の自分の生き方そのものに深く関わっていた苛酷な特攻隊体験と雖も何ほどのものでもなく、ただ自分はそれに拘りすぎたにすぎない。ここで作家は、自身の特攻隊体験とそれに固執しすぎた自分の資質を客観的に見得る域に到達したのである。つまりこの新たな時間意識の獲得こそ、それ以前の時間意識とそれ以前の「自分」からの解放、すなわち「復員」への準備を意味するのである。

三、資質の敗北と復員——「(復員) 国破れて」論

〈復員〉への準備を整えた作家は、いよいよ〈敗戦〉の真の意味を解き明かし、〈復員〉を果たすことになる。

「(復員) 国破れて」の主人公「私」は、昭和二〇年九月一日、特攻隊員だけに乗せた徴用漁船で、大島防備隊のあった瀬相の栈橋から加計呂麻島を後にする。忍び出るようなその慌ただしい脱出行が、「特攻

兵の暴発を憂慮しただけでなく、進駐米軍による特攻兵への報復的な対応の危惧をも考慮して取られ」た司令官による処置ではなく、実は「米軍の示唆による処置」であったと、戦後三十数年経って「私」は初めて知ることになる。そして「私」は、その事実「認識を新たにする程の衝撃」を受け、「目の覚める思い」をするのである。冒頭のこの挿話がすぐに示すように、この作品は、元特攻隊長の「私」が三十数年前の復員のありさまを現在の視点から再構成するというものである。これに先立つ「出孤島記」「出発は遂に訪れず」「その夏の今は」がいずれも、視点をあくまでも過去に据え、その過去を忠実に再現するというものであったとは、明らかに異なるのである。この記述の在り方は『魚雷艇学生』と同様のものであり、晩年に明確化された作家の小説論とも深く関わるものである。それを端的に要約するならば、過去と向き合うことによって現在の自分を問い直すために書く、ということである。ここでは、脱出行が司令官の取った処置だと今まで思い込んでいた自分が、新事実に出合うことによって問い直され、確かめられているのである。

作中、常に自分の問い直しが図られているが、そのきっかけとなるのは必ずしも新事実ばかりではない。例えば、外洋に出る直前、当時の「私」は、敵の目をごまかす工作として、隊員全員に帽子と襟の階級章をもぎ取らせることを指示したが、それが自分の発想に基づくものではなかったと、現在の「私」は考える。更に、当時の軍隊、自分の属した部隊には「マイナスの戦術」があったとして、その行為も「マイナスの戦術」の一つ、「児童に類する処置」であったと思い返すのである。作家が『出孤島記』連作の最後を飾る作品において、前三作品とは別のこのような方法を採用したのは、明らかに「復員」への意志

を内に秘めていたからにほかならない。当時の自分が復員する過程を追い、新事実などを加えながら一つ一つ跡付けていくことで、現在の「私」も真の「復員」を果たそうとしているわけである。当然のことながら、復員するという意識についても、当時の「私」のものと現在の「私」のものが交錯している。そして、その果てに見えてきたのは、〈敗戦〉の真の意味であった。

階級章をもぎ取ったことによる「さばさばしたいさぎよさ」と、その裏にある「行方定めぬ浮草の心細い心情」は、当時の意識であるが、それに続く記述は、当時のものであると同時に、現在の意識でもあり、〈敗戦〉の真の意味に関わってくるものである。これから帰る行く本土の情景を想像して、「私」は次のように考える。

「特殊爆弾は広島と長崎の二箇所に限られていたに拘らず、内地の到る処の土地の上に原子破壊の影響が及んでいて、全く見馴れぬ形状となり果て、人々の多くも既に死に絶えた荒涼たる光景を頭の中に描いていたのだ。すると却ってすべての束縛から放たれた気分の生じていたのはどういうわけか。原子破壊の人体に及ぼす影響など露程も考え及ばず、荒涼の天地にわずかに生き残った者が立ち直るというへんな力みに駆られるようであった。これまでに特攻死の壁に閉ざされた日々ががんに掘めになつていた反動でもあったか、思わず手に入れた自由の解放が、どんな可能をも含んでいるふうに錯覚していたにちがいがなかった」

広島、長崎の原爆による惨状についての主人公の意識は、『出孤島記』でも書かれていたが、そこでは、「感傷」であったり、自分だけがこれから死ぬのではなく誰もが死ぬのだということによる慰めであったりしただけである。ここでは、前述のエッセイ「うしろ向きの戦後」と同

様に、原爆によって人間のみならず、すべてが破壊された後に始まる新たな生の出発への希望が込められている。「すべての束縛から放たれた気分」という言葉がそれを示しているが、「すべての束縛」とはどういうことなのか。自分がこれまで属した軍隊機構はもちろんのこと、更には自分がこれまで関わってきた社会、他者、それらとの関わりの中で常に違和感を感じなければならぬ自分自身の資質、そして、いったん生を享けた人間がその資質の如何に拘らず生きなければならぬということをも意味するのである。新たな出発のためにはすべてが破壊されていなければならない。「荒涼たる」大地がふさわしいのである。「私」が「原子破壊の人体に及ぼす影響など露程も考え及ば」ず、「へんな力み」を感じるのもそのためである。ここまでは当時の自分の意識であるが、これも「すべての束縛から放たれた気分の生じていたのはどういうわけか」という疑問形で結ばれることによって、現在の「私」の意識に取って代わられる。すなわち、「すべての束縛」からの「自由の解放」が「錯覚」だったとされるのである。これは言い換えるなら、「私」の戦後の生活、ひいては作家の戦後の生活が、その「錯覚」から始まったということにもなるのである。

しかしながら、当時の意識だけを追っても、「私」が感受した「束縛」からの「自由の解放」は、次の東シナ海に出たからの場面では変様している。まず行く手に機雷を発見した「私」は、それを「ただ見ていただけ」で、対処の方法を講じようとは思わない。他の隊員にしてもそうである。なぜなら、既に部隊が部隊としての形をなしておらず、「私」を含めた誰もが特攻死という「束縛」、軍隊機構という「束縛」から放たれた自由と虚脱の状態に陥っているがためである。いつそれに触れて爆発するかもしれないという危機感を感じても、それに対し

て何かの処置を講ずることは、もとの「束縛」に再び捕えられることであり、「私」はそこに「億劫な思い」を抱くのである。どんな事態に遭遇してもそれに対する戦闘姿勢を講ずる義務が「私」にないことはまた、「気楽さ」を感じさせもするのである。それとは裏腹に、途中で米軍に拿捕されるのではないかという危惧の念もあるのだが、実際、米軍の飛行機の追跡に気づいた時、それらの思いは敗戦の実感と共に大いなる怖れに変わる。

「ああ、戦いに負けたのだ、という実感が骨身に染みて感じられた。恐らく綿密に写真が写し取られたにちがいない。脱れようのない黒い手で覆われた気持になった」

「脱れようのない黒い手」とは、新たな「束縛」にほかならない。具体的には米軍を指しているが、言わばある秩序をもった既成の組織機構のことである。もし拿捕されて本土に帰れなかったら、「私」が望む新たな生の出発は霧散してしまう。いや、拿捕されるまでもなく、この時点でもはやその望みは霧散してしまっており、「自由の解放」は束の間のものでしかなかったのである。そして、「私」の戦後の生活は、この新たな「束縛」との戦いだったのである。当時の「私」にこのことがどこまでわかっていたのか、恐らくほとんどわかっていなかったのだろうが、現在の「私」ははっきりと意識している。実際、「私」が帰りに行く本土は、思い描いていたような「荒涼たる」ものではなく、そこにはやはり今までと顔つきだけが違った社会、すなわち「束縛」があったわけである。「戦いに負けたのだ、という実感」はまさしく日本の敗戦を意味するが、そののみならず、戦後の出発にあたっての、この新たな「束縛」に対する「私」の敗北をも意味するのである。現在の「私」が敗戦時に感受した解放感を「錯覚」だとしたのも、ここ

から来るものなのであろう。そして、ここにこそ、作家島尾敏雄の〈敗戦〉と〈復員〉の真の意味があるのである。作家がこの作品に「復員」と「国破れて」という二つのタイトルをつけた所以でもある。

作家における〈敗戦〉とは、徴兵制すなわち軍隊機構に代表される「束縛」ばかりでなく、前述の「すべての束縛」に対する自分の敗北を意味していた。更に言えば、「束縛」を「束縛」と感じすぎ、それに拘らずにはいられぬ自分の資質、自分という人間の生の敗北を意味していたのである。一方、〈復員〉とは、この自らの敗北を自覚し、そこから新たな自分を作り出していくことだったのである。思えば、作家は自身の戦争体験に執拗に拘り続けたが故に、所謂〈死の棘〉体験を引き起こし、更にその〈死の棘〉体験にも拘り続けたが、そうした苛酷な体験、自分を縛る「束縛」に拘り、そこに閉じこもること、自らの敗北をはっきりと認めずにいたように思える。しかし作家は、この「復員」「国破れて」に至って自らの敗北を自覚し、戦争体験の作品化のみならずその自分の資質にも結末をつけることで、新たな自分を作り出そうとしていたのである。ミホ夫人の「沖繩への思い」(平三・「脈」四三号)によれば、作家には「これまでにない全く新しいスタイルの作品」への構想があったらしいが、書かれることはなかったこの作品がそのことを表しているように思う。その新たな出発は同時に死であった、すなわち「出発は遂に訪れ」なかったわけであるが、「(復員)国破れて」を書くことにより、作家は真の〈復員〉を果たしたのである。

(了)

次の諸作以外からの引用は、すべて『島尾敏雄全集』(晶文社)によった。

- 『過ぎゆく時の中で』(昭五八・三、新潮社)
- 『魚雷艇学生』(昭六〇・八、新潮社)
- 『震洋発進』(昭六二・七、潮出版社)
- 「(復員) 国破れて」(昭六二・一、「群像」)

参考文献

季刊「脈」第四三号(特集島尾敏雄、平三・五、脈発行所)

(やまなか ひでき・一九九三年修士課程修了)